

・ えらぶらず、へつらわず、自分の分限ぶんげんを守りなさい。 ※分限：身のほど。
けんやく

・ 儉約けんやくにつとめなさい。

・ いつも勝っていると油断ゆいごんが生まれることを、忘れないようにしなさい。
わす

この遺言ゆいごんには、父・早雲から領国を治めるための教えを受けつぎ、領地を広げながらも、堅実けんじつに生きることが大切にした氏綱うじつなの考え方がよく表れています。

四 北条氏康うじやすの時代

1 相模さがみの獅子しし、北条氏康

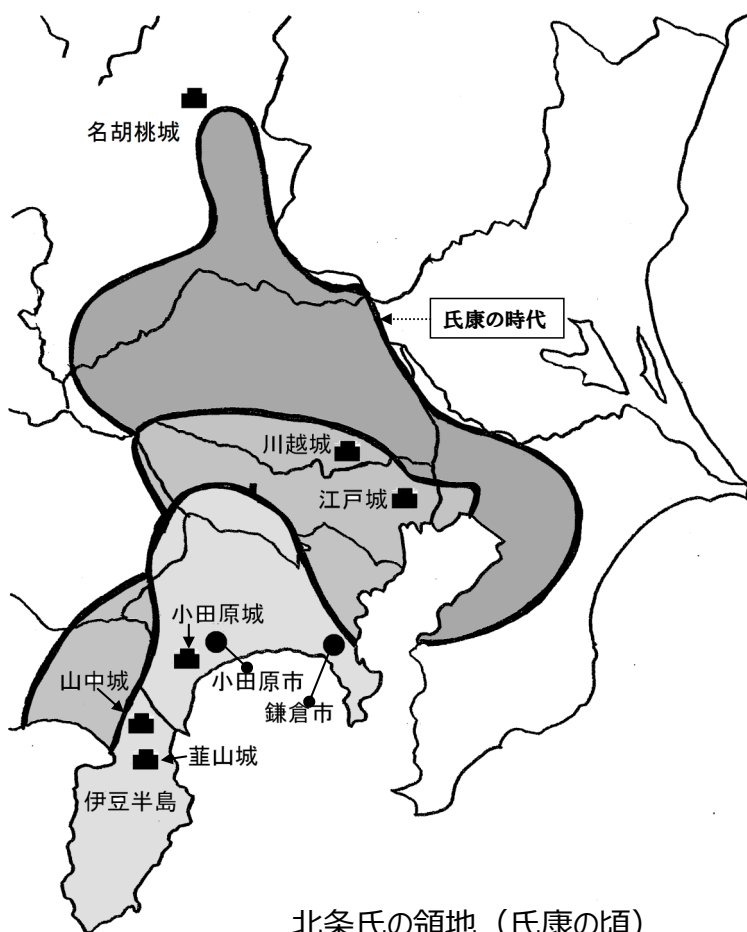
氏綱のあとをついだ三代目の氏康は、「相模の獅子」とたたえられるほどの人でした。氏康は、関東地方から山内上杉氏を追いはらい、扇谷上杉氏おうぎがやつうえすぎをほろぼし、北条氏の力をさらに伸ばすとともに、領民りようみんのために、いろいろなきまりを整えていきました。



2 一大危機を打ち破る

氏綱に川越城をうばわれた扇谷上杉氏と山内上杉氏が、氏綱の死後、氏康の前に立ちはだかりました。また、氏綱に領地を奪われた今川氏も、北条氏を倒す機会をじっとうかがっていました。義元には甲斐の武田信玄も味方していたため、当時の氏康は四方を敵に囲まれた状態でした。

大変不利な状況にあった氏康ですが、今川氏から奪った領地を返すことを条件に、義元と戦わせない約束を結んだり、武蔵の国の武将に近づいたりして、できるだけ敵を少なくするように努めました。



そのような中、一五四六年、二つの上杉氏ふるかわけぼうと古河公方の足利氏の連合軍八万人が、川越城かわごえじょうを取り囲みました。それに対する北条軍は八千人ともいわれ、圧倒的に氏康に不利な戦いとなりました。この戦いは大変激しいもので、北条氏にとって大きな危機うばでしたが、氏康は連合軍を打ち破りやぶ、一気に松山城（埼玉県）をも奪って、武蔵の北部にまで支配を広げることになりました。氏康は、夜に敵をおそう作戦をとって、この戦いに勝利したと言われていますが、この勝利には、かつて氏綱が手に入れた領地を今川義元よしもとに返してまで、今川氏との戦いをさけた氏康の冷静な判断があったのころと思われまゝす。この戦いのあと、氏康は関東地方での争いを有利に進めることができるようになりました。

一五五九年、氏康は四四才で子の氏政うじまさにあとをつがせましたが、その後も小田原城の本丸とどろに留まりました。引退したあとも、まだ強い力をもっていた氏康は、何かにつけ氏政に助言をしていました。



3 今川氏、武田氏との三国同盟 さんごくどうめい

一五五二年から一五五四年にかけて、氏康は駿河の国の今川義元、甲斐の国の武田信玄と三国同盟を結ぶことで、おだな戦いをさせて、関東地方の政治に集中して取り組めるようにしました。その後、武田信玄が駿河の国を攻めたことで、この同盟はやがて破られることとなりました。しかし氏康は、上杉謙信と同盟を結ぶ交渉を自ら進めるなど、戦だけでなく、外交の面でも力を発揮しました。

4 優れた政治で領民をまとめた氏康 すぐ やぶ

氏康は、領内の検地を徹底して行い、家臣たちの領地やその収穫高、戦や工事のときに負担する物や人数を細かく記録した「小田原衆所領役帳」をつくりました。これにより家臣の負担がはつきりとし、家臣団や領民をしっかりとめることができるようになりました。

また、氏康は税のしくみを改め、複数あった税を整理し、収穫した米の一定の額を税として、直接北条氏に納めさせることにしました。米を計るときますの升の大きさを

を領地の中で同じにしたり、米の計量を農民自身にさせたりするなどのきまりも定めていきました。

こうしたことにより、地方の領主は、自分勝手に農民から税をとることができなくなり、結果として、農民の負担は軽くなりました。その一方で、地方の領主の力は弱まり、北条氏の力はより大きなものとなっていきました。

また、きまりが守られないようなことがあれば、領民のだれもが直接北条氏に訴えることができるように、「目安箱」を置きました。また、さまざまな問題を裁くために、「評定衆」とよばれる組織をつくりました。こうして、領民と北条氏との間にいた支配者たちが、勝手な行動をできないようにしたのです。領民は、ますます北条氏を信頼するようになりました。

このように、北条氏がさまざまな優れた政治を



行っていたので、当時の小田原は、人々にとってとても住みやすい土地でした。のちに、徳川家康が小田原の領主になったとき、領民はいつまでも北条氏をしたっていて、とてもやりにくかったという話が残っています。

一五七一年、「相模の獅子」とよばれた氏康も病気には勝てず、五七才で亡くなりました。氏康の死が小田原の城下に伝えられると領民はみな泣き崩れて、その死を惜しんだといわれています。

今に伝わるエピソード

あるとき、氏康は大砲や鉄砲をうつ砲術の訓練を見ていました。「ドーン」「バーン」という、大砲や鉄砲の大きくて激しい音に、氏康は驚いて、気を失ってしまいました。やがて、気を取りもどした氏康は、「家来の前で恥をさらしてしまった。」と思い、自害（自殺）しようとしてしました。それを見た家来は、「初めて見るものに驚かれるのは当然なことです。それは恥ではございません。むしろ、あらかじめ、心構えをしておくことが大切なのです。」と忠告しました。それから先、氏康は心構えを大切にし、常に堂々としていたという話が伝えられています。が、真実は定かではありません。